

目次

はじめに オルタナティブの模索 1

第1章 グローバル社会と想像力 9

1. 共感と想像力 9 / 2. 社会学的想像力と歴史的想像力 12 /
3. 批判的想像力 14 / 4. 対話と想像力 16 / 5. ナショナルな想像力の限界を越える 18 / 6. 社会階層と想像力への制約 20 /
7. リアリティの分断とステイグマ化 22

第2章 グローバリゼーションのメタファー 29

1. 「流れ」「渦」「沈殿物」 29 / 2. 「抗う」「乗りこなす」「流される」 33 / 3. 「庭」「荒海」「吹き溜まり」 36

第3章 ^{モビリティ}移動することについて 45

1. 物理的移動——移住者・定住者・越境者 45 / 2. 象徴的な移動——階層移動とライフコース／ステージ 48 / 3. 社会・文化的条件としてのモビリティ——コスモポリタニズムと分断 50 / 4. システムの標準化とモビリティの加速 59

第4章 トランスナショナルな想像力へのレッスン 67

1. 「はやぶさ」の終焉の地から 67 / 2. 「放浪者」と例外としての抑留施設 69 / 3. もうひとつの例外——歓待される「旅行者」たち 71 / 4. 「溜まり続けること」の主体性 75 / 5. 方法論から規範へ——他者からの呼びかけに応える 79

第5章 「スピード感」と加速する資本主義 87

1. グローバリズムと時間短縮=効率化への欲望 87 / 2. 「ゆとり」と福祉国家 88 / 3. 「居場所」とコミュニティ 92 / 4. 「つながり」の二面性 95 / 5. 「スピード感」ある「改革」と民主化の危機 97

第6章 惨事と政治 105

1. 世界リスク社会と個人化 105 / 2. 「ピンチはチャンス」？ 107 / 3. 災害ユートピア？ 110 / 4. 「焦り」の活用 112 / 5. 「間」とサバルタン性 113 / 6. 「喪」とケア 115

第7章 ネイションとナショナリズム 121

1. 思想・帰属意識・身体感覚 121 / 2. ネイションの起源——近代主義とエスノ・シンボリズム 123 / 3. シビック・ナショナリズムとエスニック・ナショナリズム 126 / 4. 「熱い」ナショナリズムと「冷たい」ナショナリズム 129

第8章 グローバル時代のナショナリズム 137

1. パラノイア・ナショナリズム 137 / 2. 福祉ショーヴィニズム——「国を愛すること」と「国に愛されること」 138 / 3. リベラル・ナショナリズムとその限界 141 / 4. 「国益」をめぐるポリティクス 145 / 5. テロリズムとナショナリズム 147

第9章 ヘイトスピーチと差別 157

1. ヘイトスピーチを黙認する「空気」 157 / 2. 構造化され身体化されるレイシズム 160 / 3. 「甘え」を言い訳にした共感拒否 163

- ／4. 勘違いの共感と反動としての反感 166／5. 逆差別について
169／6. ヘイトスピーチへの法規制と「出会い直し」 172

第10章 共生と対話 181

1. ある場所で出会うこととしての共生／共棲 181／2. 統合と管理の論理 182／3. 選別と分断の論理 185／4. 「聴くこと」から始まる対話 190／5. 世界に注意深くあること 193

おわりに 対話主義者たちへの覚書 197

1. 「中立」という暴力 197／2. 対話主義者が敗北するとき 201
／3. 思いやりと、ずるがしこさ 203／4. 対案と対話 204／
5. 「きっかけ」と「なりゆき」 206

初出一覧 211

はじめに | オルタナティブの模索

本書では、現代の社会変動とそれに伴って出現する時代状況を読み解く想像力について考える。なぜこのような試みをするかという点、現代社会が想像力の危機に瀕しているのではないかという懸念がたびたび表明されているからである¹⁾。日本を例にとっても、その根底に他者の置かれた立場や思いに対する想像力の不足、あるいは想像すること自体の拒絶があると思わざるをえない出来事が頻発している。本書第9章で考察する、2000年代後半から社会問題化した外国人住民などへのヘイトスピーチはその典型である。こうした排外主義的で非寛容なまなざしはエスニック・マイノリティ* (章末キーワード参照、以下同) だけではなく、障がい者や貧困層といった他の社会的弱者のカテゴリーにも向けられる。生活保護受給者に対するバッシングは、後を絶たない。また本書を執筆中の2016年7月には神奈川県相模原市の障がい者福祉施設で、障がいとともに生きる人々とその家族への想像力を著しく欠いた人物によるヘイトクライム、大量殺人が起きた。

国際社会に目を向ければ、こうした出来事が日本の特殊事情でも、一部の異常な人々の起こした例外でもないことがわかる。グローバルに拡散する宗教的過激主義に影響されたテロリズムについては本書でも随所で言及するが、これが被害者への想像力を欠いた行為であることは言うまでもない。その一方で、まさにその「テロとの戦

1) たとえば、井手英策・松沢裕作編『分断社会・日本——なぜ私たちは引き裂かれるのか』岩波書店、2016年。

い」がひとつの発端となって引き起こされた先進諸国への難民の大量流入が、新たな「テロの脅威」と結びつけられる。その結果、第8章で述べるように、移民や難民を「われわれ」の安全・安心を揺るがす脅威だとする排外主義的ナショナリズムの影響が強まり、そうした人々をわれわれと同じ生身の人間、同じ社会の仲間として想像する契機がますます失われていく。また第5章で考察されるように、グローバリゼーションによって加速する資本主義は福祉国家による社会的シティズンシップの保障を困難にしつつある。それに代わって台頭する、自立と自己責任を強調する新自由主義／グローバリズム*によって先進諸国の社会福祉政策は厳格化し、貧困を無能の証や罪と断ずるような想像力の欠如が先進諸国に蔓延している²⁾。

歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキは早くも2000年代初頭に、「批判的想像力の危機」の進行に警鐘を鳴らしていた。それは次第に影響力を強める「道徳的に空虚な地球規模でのネオリベラリズム」と、「道徳のスローガンで粉飾された大衆扇動的ナショナリズム」に対抗するための「説得的オルタナティブを想像し、かつ伝達するという能力」が、知識人やメディアに欠如している状況を指していた³⁾。彼女の時代診断は2010年代後半の日本社会において、ますます重要になっている。新自由主義／グローバリズムは、グローバルな市場原理主義に適応するための「改革」を、「他に選択肢はない(There is no alternative)」と人々に押しつけようとする。「情勢は急激に変化している」から、「緊急事態」だから、「国益を守る」ためには「この道しかない」そして「この道を力強く前へ」、

2) ロイック・ヴァカン(森千香子・菊池恵介訳)『貧困という監獄——グローバル化と刑罰国家の到来』新曜社、2008年。

3) テッサ・モーリス＝スズキ『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』平凡社、2002年、39-40ページ。

と言い含められる。時代の変化に対応できない人々は、「自己責任」の名のもとに切り捨てられる。人類学者のガッサン・ハージが示唆するように、このような状況に置かれた人々はオルタナティブを模索するラディカルな想像力を奪われ、切り捨てられる「痛み」に「耐えて、しのぎ切る (waiting out)」よりほかはない⁴⁾。それでも現状とは異なる社会のあり方を想像しようとする人々は、机上の空論を語るエリート、あるいは裏切り者として非難されることになる⁵⁾。このような風潮は、批判的思考を育む教養教育、人文社会科学教育への逆風の一因にもなっている⁶⁾。

想像力は、空想／妄想することではない。地理学者のイーファー・トゥアンは現実の探求に向けられた知的活動としての想像力と、閉塞的な自己満足としての「空想」を区別した⁷⁾。空想が何らかの被害妄想や強迫観念を伴って肥大していくと、「妄想」になると言ってもよい。つまり空想／妄想とは区別された「リアルな」想像力を持ち続けようとすることは、自己満足でも被害妄想／強迫観念でもないあり方で、他者とその集合としての社会を理解しようとすることである。そしてこの社会へのリアルな想像力は、多くの自称「リアリスト」たちが陥っている体制（大勢）順応主義（conformism）でも現状追認主義（confirmationism）⁸⁾とも異なる。それは政治哲学者ナンシー・フレイザーが言うところの、グローバル化の時代に

4) Ghassan Hage, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*. Carlton, Victoria: Melbourne University Press, 2015, pp. 33-45.

5) ガッサン・ハージ（塩原良和訳）『希望の分配メカニズム——パラノイア・ナショナリズム批判』御茶の水書房、2008年、106-113ページ。

6) マーサ・ヌスバウム（小沢自然・小野正嗣訳）『経済成長がすべてか？——デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013年。

7) イーファー・トゥアン（山本浩訳）『モラリティと想像力の文化史——進歩のパラドクス』筑摩書房、1991年、230ページ。

おける批判的「再想像」（「再フレーム化」）である⁹⁾。すなわち、様々な要因が複雑に入り組んで形成されるグローバル社会をリアルに考えるために、これまで見えていなかった背景を可視化して問題を再設定しようとすることである。自明なものに見えた既存の社会現象や構造を、相対化していく。それによって、それまで見えていた自己-他者、原因-結果、問題-解決策とは別のあり方、すなわち、オルタナティブを探ることが可能になる¹⁰⁾。

他者／社会への想像力が閉塞して空想／妄想へと劣化し、先述したようなマイノリティや社会的弱者への排外主義・社会的排除という風潮を助長している。この負の連鎖を断ち切るために、差異を持った人々が共に生きる社会が可能なのだという力強いオルタナティブへの展望を示していかなければならない。本書では、それを可能にするグローバル社会への想像力を読者が育む手助けをしたい。まず第1章では、想像力という概念についての社会的な考察を行う。想像力は人間に本来備わっている特性かもしれないが、広い意味での「知ること」を通じて伸ばされ、育まれるものでもある。それゆえ第2章～第9章では、グローバリゼーション、高度資本主義、ナショナリズム、レイシズムといった現代の社会変動の諸相を概観しながら、読者がそれらを教科書的な見解とは異なった別のあり方で再想像するためのヒントを提示したい。私は、そうした再想像が目

8) ハージは、社会の常識や固定観念に対して批判的姿勢を持たず、一般市民の持つ自分たちが正しいという思い込みを追認するだけの主張を繰り返す評論家たちを「追認主義者 (confirmationist)」と揶揄した (ハージ前掲書、106-113 ページ)。

9) ナンシー・フレイザー (向山恭一訳) 『正義の秤——グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』法政大学出版社、2013年。

10) Hage, *op. cit.*

指すべきオルタナティブな社会の方向性は「対話」と「共生」というキーワードによって表現できると考えている。そこで第10章と「おわりに」では、差異を有する人々が共に生きることを可能にする技法としての対話という概念について考察してみたい。

* * *

本書のもとになったのは、私が慶應義塾大学法学部政治学科で開講している「社会学」および「社会変動論Ⅰ・Ⅱ」の講義ノートである。講義ノートをもとに執筆するのは前著『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』（弘文堂、2012年）に引き続いての試みであり、その意味で本書は前著の続編でもある。前著は学術的な多文化主義・多文化共生論の学部生向け入門書として書かれたが、本書はより裾野を広げ、グローバル社会論を中心とした社会変動論のテキストとして読まれることを想定している。テキストとしての便宜を考え、本文の内容の理解を助けるため、*をつけたキーワードには各章末に解説を付した。もっともテキストとはいえ、本書は学説的知識の体系的な紹介には力点を置いていない。むしろ、読者が知っているつもりでいた現代の社会現象を社会学の概念をツールとして再考することで、オルタナティブを想像する思考のイメージを具体的に示したいと考えた（あるいは、示したいと考えながらいつも教室で授業をしていた）。それに成功しているかどうかはわからないが、社会学の概念を使って私たちが社会をどのように再構想できるのかという、見本集のようなつもりで本書を読んでいただければありがたい。下手な見本でも、それを参考に社会変動への想像力をさらに羽ばたかせてくれる人がいれば、意味はあるのだろう。なお、本書で述べられていることをより学問的に考えたい方は、引用されている文献を自分で読んでみてほしい。各章末にはそのため

の一助として、主要文献を列挙し簡潔な解説を添えた。

慶應義塾大学出版会の乗みどりさんには、本書の企画から編集まで大変お世話になったことに感謝しつつ、私の個人的事情で執筆が遅れたことを改めてお詫びしたい。また本書の一部は、既発表の学術論文やエッセイ、編著書所収論考等を改稿したものである。それぞれの初出は巻末を参照されたい。転載をご快諾していただいたみなさまに、深く御礼申し上げたい。なお、本書は全体として文部科学省科学研究費助成事業（JP16K04094）の成果の一部であり、記して御礼申し上げます。

最後に、2013～16年度に私の講義や演習を履修してくださった学生のみなさんに感謝したい。特に大教室での講義は、自修課題は多いうえ、何百人履修していようが構わずグループワークやディスカッションを執行してしまう、ちょっと風変わりで大変な授業だったと思う。それでもたくさんの方が熱心に履修して、討論や課題レポート、期末試験を通じて貴重なフィードバックを寄せてくれた。授業が終わったあと、質問に来てくれて長い間話し込んだ学生もたくさんいた。そういう対話のなかから得られたすべてを本書に反映できたわけではないが、本書が少しでも意義あるものになっているのであれば、それは学生のみなさんのおかげである。

キーワード

マイノリティ／マジョリティ (minority/majority)

マイノリティとは、その人が有する差異に基づいて社会的に不利な立場に固定化されてしまった人々をいう。また、その人を社会的に不利な立場に立たせやすい差異がマイノリティ性である。どの差異がどの程度のマイノリティ性を持つかは、社会や状況によって違う。一方マジョリティとは、マイノリティ性を比較的有しない人々、言い換えれば「ふつう」だとされる人々のことである。ある人がそ

の社会における「ふつう」とされる（たとえば日本社会において「日本人らしい」とされる）度合いが高いほど、その人は「マジョリティ性」を多く持つことになる。マジョリティはマイノリティに対して優位に立つが、その社会においてはそれが「ふつう」であるがゆえに、その序列や不平等は意識されることが少ない。

新自由主義／グローバリズム (neoliberalism/globalism)

デヴィッド・ハーヴェイは新自由主義を「強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、と主張する政治経済的実践の理論」と定義した。新自由主義は第二次世界大戦直後、ハイエクやミルトン・フリードマンらとともに台頭した知的潮流であり、1970年代から80年代にかけて、米国や中南米で影響力を確保した。そして1980年代以降の構造調整プログラムとワシントン・コンセンサスを経て世界的な潮流となっていた（渡辺治監訳『新自由主義——その歴史的展開と現在』作品社、2007年）。一方グローバリズムとは、世界が単一のグローバル市場に包含され、国民国家の政治的権威が低下することで「ボーダーレス化」し、そのなかで人々が自由な経済競争に参加すること（「フラット化」）が人々の生活全般を大きく変えていくことを、不可避であり、なおかつ好ましいものとする主張である。新自由主義とグローバリズムは重なる部分があり、しばしば混同されるが、前者の価値観や理論を前提に経済のグローバル化を推進するのが後者だと整理できるだろう。

文献案内

- ガッサン・ハージ（塩原良和訳）『希望の分配メカニズム——パラノイア・ナショナリズム批判』御茶の水書房、2008年
現代国家が人々の希望を再分配するメカニズムが新自由主義によ

って機能不全に陥り、高まった不安や怨念から排外主義が台頭する。それが移民や先住・少数民族問題を深刻化させ、グローバルなテロリズムとの負の連鎖が生じる。2003年に原著が刊行された本書が示した現代社会分析の見取り図は、今日でも有効性を失っていない。

○マーサ・ヌスバウム（小沢自然・小野正嗣訳）『経済成長がすべてか？——デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013年

現代米国の著名な哲学者による大学・教育論。グローバル化によって短期的な利益の追求が最優先される傾向が強まるなか、経済成長と両立し、その暴走を防ぐ批判的思考力と他者への共感の能力を養う人文学・芸術教育の重要性を提起する。原著は2010年刊行。

○ナンシー・フレイザー（向山恭一訳）『正義の秤——グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』法政大学出版局、2013年

国民国家の自明性が揺らぐなかで、誰が何を代表するかを、どのように決めていくのか。米国の政治哲学者が2008年に著した、グローバル化の時代に対応した正義論の刷新の試み。

第1章 | グローバル社会と想像力

1. 共感と想像力

社会学を学んで、いったい何の役に立つのでしょうか、と学生に尋ねられることがある。うん、何の役にも立たないよ、と煙に巻くことにしている。「役に立つ」って、そもそもどういうことだろうね。「役に立つ」ことを学ぶことが、いつも正しいことなのだろうか。そういうことを考えるために社会学は「役に立つ」のかもしれないね、と。

とはいえ「社会学は何の役に立つのか」という問いは、社会学を大学で教える私にとっても重要である。いまのところ、社会学は「他者の立場に立って考える」ことを学ぶために、特に役に立つ、という答えに落ち着いている。「社会」という概念は「他者との相互作用が反復されて構造化していくこと」とシンプルに定義できるので、「他者の立場に立って考える」とは、物事を社会的に考えるということの、実は言い換えである。

それでは、「他者の立場に立って考える」すなわち社会的に考えるとは、どういうことなのか。まず「他者の立場に立って考える」ことは、「他者の経験や感情を自分のことのように感じる」こととは異なる。後者は「共感」と呼ばれる。アダム・スミスは、共感 (sympathy)、哀れみ、同情といった心的状態が想像力によって生み出されると考えていたようだ¹⁾。現代においても、たとえば社会学者の津田正太郎は共感 (empathy) と同情・同感 (sympathy) を「他者の置かれた状況や、その状況において他者が抱くであろう心理を想像すること全般を『共感』とし、他者の不幸や悲しみに対し

て生じるそうした反応を特に『同情』とする」と定義している²⁾。ただし本書では、empathy と sympathy を厳密に区別せず、津田の言う同情に近い意味で共感という言葉を用いる。

他者への共感、人間関係や社会を成立させる重要な要素だ。だが、共感のみで成立する関係性には限界もある。同情としての共感、他者の感情や置かれた状況を「自分のことのように感じる」感情移入を伴うとされる。そうであるならば、人は自分と似ている人、近い状況に置かれた人により共感しやすく、自分と異なっている人や状況ほど固定観念によって判断しがちになる。哲学者のマーサ・ヌスバウムによれば、同情という感情を抱いた人は、以下のような判断を行っている。すなわち①他人がひどく悪い目に遭っている、②人は自分の窮状のすべてに責任があるわけではない、③私たち自身が同じような目に遭いやすい、④同情の対象となる人は、同情的な感情を抱いている者にとって大切な人だ³⁾。

特に④の条件は、自分と似ていたり良く知っていたりする他者に共感しやすく、そうではない人には共感しにくいということの意味する。もちろん、似てもいないし良く知りもしない人に感情移入することもあるが、それは一方的な思い込みや不十分な知識による誤解である可能性が高い。もっとも身近で良く知る他者であっても、自己と他者が決して同じではない以上、そこには常に「わかりあえ

1) アダム・スミス (高哲男訳) 『道徳感情論——人間がまず隣人の、次に自分自身の行為や特徴を、自然に判断する際の原動力を分析するための論考』講談社、2013年。

2) 津田正太郎「国民的連帯の再構築とマスメディア——共感原理の可能性と危険性」『社会志林』59巻4号、2013年、58ページ。

3) マーサ・ヌスバウム (河野哲也監訳) 『感情と法——現代アメリカ社会の政治的リベラリズム』慶應義塾大学出版会、2010年、62-64ページ。

ないこと（共約不可能性）*がある。したがって、感情移入としての共感が、実は「勘違い」である可能性は常にある。それに気づいたとき、他者に「裏切られた」という反感が高まることもある（第9章参照）。

一方、「他者の立場に立って考える」とき、他者との同一化や感情移入は必ずしも前提とされない。違う人間である以上、他者と私は完全に同じ経験や感情を共有することはできない。またその人を嫌いであったり敵対していたとしても、その他者の「立場に立って考える」ことはできる。「敵を知れ」という格言は、国家間の戦争から企業の出世競争、スポーツの試合に至るまで、あらゆる場面で実践されている。有名なルース・ベネディクトの『菊と刀』⁴⁾のように、戦争中の交戦国ないし仮想敵国の社会や文化を（しばしばその国に実際に行って調査することが難しい状況で）知る試みが端緒となった地域研究も少なくない。

したがって「他者の立場に立って考える」ことは、他者に感情移入することではない。それは他者について「想像する」ことなのである。私たちは共感できない他者のことも、反感を抱いている他者のことさえ、想像することができる。そんなとき、私たちはその他者の特徴や他者を取り巻く状況を「知ろう」と努める。つまり、想像力を深めるには共感に加えて「知っていること」すなわち知識が必要である。もちろん知識さえあれば良いわけではないが、他者に対する知識を持つことは私たちの他者に対する感受性の限界を補い、押し広げてくれる。

それゆえ本書では他者に対する想像力を、個人が知識を活用しな

4) ルース・ベネディクト（越智敏之・越智道雄訳）『菊と刀——日本文化の型』平凡社、2013年。

から自らの共感の限界や制限を押し広げて、他者を理解しようとする努力、と定義したい。社会学とは「他者の立場に立って考える」ことを学ぶ学問であるという先ほどの命題は、社会学とは「他者／社会に対する想像力を鍛えるための知識を学ぶ」学問であると言い換えることができる。

なおこの場合の知識とは、言語化・体系化され専門分化されたものとは限らない。経験としての知、身体化された知としてのハビトゥス*もまた「知っていること」である。それゆえ、「感じる」こと（感情）と「考える」こと（思考）の区別は、実際には曖昧である。先述したように、ヌスバウムも同情や共感のような感情には思考が伴うとしている。また感情社会学の知見は、そもそも人間の感情は「自然なもの」というよりは社会的規範によって構成・規定される部分が大きいことを明らかにした⁵⁾。それゆえ他者を想像するとは、他者について「感じながら考える」ことだという表現のほうが適切だろう。

2. 社会学的想像力と歴史的想像力

米国の社会学者C. W. ミルズは、人間と社会のあり方を考察する際の想像力の重要性を力強く宣言した。彼は1950年代の時点で、人々が自分自身の価値観に従って自分の人生を決定する能力が、社会の急激な変化によって危機に瀕しているという時代診断をすでに行っていた。その危機を克服していくためには情報をただ集めるだけでなく「情報を駆使し理性を発展させることによって、かれら自身の内部や世界におこることがらを、明晰に総括できる精神の資

5) 岡原正幸ほか『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』世界思想社、1997年。

質」が必要であり、それをミルズは「社会学的想像力」と名づけた。それは「巨大な歴史的状況が、多様な諸個人の内面的生活や外面的生涯にとって、どんな意味をもっているかを理解する」力であり、「歴史と生活史とを、また社会のなかでの両者の関係をも、把握することを可能にする」⁶⁾。すなわち社会学的想像力とは、一見すると無関係に見える個人の私的問題と社会構造がどのように関係しているのかを「省察および感受性によって」把握し、それによって人間と社会についての新たな価値観や発想を「驚き」とともに獲得する営みなのである⁷⁾。

ミルズは、人々が社会学的想像力を育むためには歴史に関する知識が不可欠だとも考えていた⁸⁾。その歴史学の立場から、現在を生きる私たちの過去・歴史との関わりという意味での想像力の重要性を指摘したのがテッサ・モーリス＝スズキだった。1990年代の日本における戦争責任／戦後責任をめぐる論争、あるいは自身が英国から移り住んだオーストラリアの先住民族問題を念頭に置きつつ、彼女は「連累」という概念を提起した。それが意味するのは、その人自身が直接加担していない歴史的な不正義に対して正当な対応がなされていない現代社会から直接・間接に何らかの利益を受け、自己の人格や生活を形成してきた人には、その過去の不正義と関わりがあるということである⁹⁾。そのような過去への連累の意識は、歴史的知識によってだけではなく、過去に生きた人々に対する想像力

6) C.W.ミルズ(鈴木広訳)『社会学的想像力<新装版>』紀伊國屋書店、1995年、5-7ページ。

7) 同上書、9-10ページ。

8) 同上書、188-216ページ。

9) テッサ・モーリス＝スズキ『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』平凡社、2002年、56-58ページ。

によっても形成される。それゆえ、過去への連累の意識を適切に持ち続けるためには、異なった歴史理解に立つ人々との対話を通じて歴史を絶えず再想像し続けることが必要である¹⁰⁾。

3. 批判的想像力

この連累的想像力は、私たちがいま生きている社会のあり方への「歴史に学んだ反省」に基づく批判的意識を呼び起こす。「批判(critique)」とは、「常識」だと思われていること、あるいはある特定の人々が私たちにあからさまに、あるいは暗に押しつけようとしているものの見方を疑い、別の見方ができないかどうかを模索することであり、それを通じて現状をより良くしていくことである。学問の世界に限らず、批判的(critical)であるということは、既存の常識を疑い、それとは異なる(オルタナティブな)価値観や生き方を目指す姿勢である¹¹⁾。

しかし現代の日本社会では、批判という言葉は非難や否定、中傷としばしば混同され、敬遠されがちである。批判ばかりしている人は、協調性がないとか、建設的でないとか言われる。しかし批判は対象を否定したり、破壊することではない。むしろ疑うことによって新しい発想、価値観、方法を創造することである。つまりクリティカルであることはクリエイティブであり、プロダクティブであり続けようとすることである。したがって個人や社会が健全であるためには「批判的思考」が不可欠である。そうでなければ、人々や社会は大勢に流されてしまい、自分で判断する力を失ってしまうだろ

10) 同上書、50-59ページ。

11) Ghassan Hage, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*. Carlton, Victoria: Melbourne University Press, 2015.

う。急激な変化の時代において、現状の問題点を見極め、より良い社会と人間の生き方を考えていく批判的思考の前提となるのが、社会と歴史に対する想像力なのである。

しかし、過去に起こった不正義と自分自身の連累を問い「歴史に学ぶ」ことは、私たちを不安にもさせる。それは、私たちがこの社会に存在することの倫理的な根拠を揺るがしてしまうからだ。それゆえ、過去の不正義との連累を想起させるような他者との関わりを想像することは、ある種の人々にとって不快で、受け入れがたいものとなる。だからこそ、日本を含む多くの社会の歴史修正主義者*は、「歴史に学ぶ」という連累的想像力の呼びかけを忌み嫌ってきた。かれらの世界観では、「歴史に学ぶ」連累的想像力は個人がその社会に存在する価値を貶め、ひいては社会全体を衰退させるものだとされる。それは「自虐的である」と拒否され、「未来志向」の名のもとに過去を「済んだこと」として「水に流す」ことが求められる¹²⁾。こうして1990年代の日本で台頭した「自虐史観批判」は、済んだことを水に流すための「新しい歴史教科書」の制定・採択の運動として展開していった。それは2000年代後半以降の草の根保守運動の世界観にも、主にインターネットを媒介として影響を与えた¹³⁾。

過去の不正義への連累に向き合う姿勢が「自虐的」だという非難は、自分や自分の属する社会への「誇り」や「愛情」をあまりにも狭く捉えすぎていることを指摘しておく。たとえば、お互いの良い面しか見ようとしない恋人同士、子どもの悪いところを直視しよう

12) 塩原良和『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』弘文堂、2012年、42-45ページ。

13) 樋口直人『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年。

としない親も、相手のことを愛し、誇りに思っているのだろう。しかし、相手の悪い面を指摘して批判するパートナーや親もまた、相手を愛し誇りに思うがゆえに、そうする。もちろん、愛している人の悪いところを直言するには勇気がいる。相手を回復不可能なほどに傷つけてしまうのではないかと、躊躇する。相手からの反発を受けて自分が傷つくことを、恐れもする。しかしそれでも相手のことを想って忠告し、叱ろうとする人はいる。

むしろ愛する相手を批判しないことを選ぶとき、私たちはその人を「思いやって」いるのだと言い訳しつつ、実は自分自身が傷ついたり嫌な思いをしたくない、あるいは、ただ相手と深い話になるのがおっくうで、そうしないだけなのかもしれない。相手の悪いところ、弱いところを直視しない愛情や誇りは、自分自身の弱さや悪い側面を直視することからも逃げている愛情や誇りなのかもしれない。相手や自分を傷つける危険をなるべく避ける知恵を働かせつつ、万が一そうってしまったときの責任からも逃げずに、愛する人の弱さと、それを受け止めきれない自分の弱さに向き合おうとすることは、愛ではないのだろうか。

「歴史に学ぶ」連累的想像力を働かせながら、社会の現状に対して批判的意識を持つことで、より良い未来を構想することが可能になる、それが生産的で創造的な知的営みとしての、モーリス＝スズキの言う「批判的想像力」なのである。

4. 対話と想像力

他者／社会に対する想像力とは他者との共約不可能性を前提として、なお他者を理解しようとする知的営みだと述べた。しかしそうであるからこそ、それは勘違いや誤解を免れない。他者への想像力は常に、独りよがりの他者への妄想（「はじめに」参照）へと陥って

しまう危険があるのだ。別の言い方をすれば、他者に対する想像力は、他者への固定観念（ステレオタイプ）*を突き崩すと同時に、新たな他者への固定観念を絶えず形成する。

もっとも固定観念自体は、人間が現実を理解するために避けられないものでもある。固定観念と妄想は、完全に同じものではない。自らの固定観念が他者の生きる現実や、そこでかれらが抱く思いとかけ離れていないかどうかを確かめようとするかどうか、想像と妄想を分かつ分岐点となる。他者を想像することに常に伴う勘違いを修正していくために必要なのは、自分がどのような勘違いをしているのかと、想像した他者に対して絶えず問いかけ、返答を得ようとする、つまり「対話（dialogue）」である。以前の拙著で、私は「対話」を「他者との相互作用を通じた相互変容を行う意思」、すなわち他者と「わかりあおう」とするのではなく「かわりあおう」とすることだと定義した¹⁴⁾。この対話の概念については、本書第10章で若干、修正・発展させたい。

対話への意思は、自分と主張を異にする人々がなぜそのような主張をするに至ったのかを想像することを通じて、意見が違っていたとしてもその他者を自分と対等な立場の人間であると承認できる力を養う。こうした対話によって絶えずバージョンアップされ続けることで、他者／社会への批判的想像力が可能になる。しかし、これは想像以上に難しいことである。たとえば戦争や植民地支配、マイノリティに対する差別や暴力を反省して克服しようとする、いわゆるリベラル・進歩的な人たちが、いつも被害者や弱者たちと誠実に対話をしてきたかといえ、そうとは限らない。そうした人々がマイノリティと対峙する際に、相手の話を「聞いたつもり」になって

14) 塩原前掲書。